

評議員立候補に関するアンケート結果

氏名	所属	氏名	所属
評議員・幹事 阿部 和夫	甲南女子大学	評議員 奥村 元昭	東大寺福祉療育病院
評議員・幹事 綾田 裕子	大阪厚生年金病院	評議員 関谷 博之	関谷クリニック
評議員・幹事 大澤 傑	住友病院整形外科	評議員 橋本 務	葛城病院
評議員・幹事 大塚 信一	大津赤十字病院	評議員 廣島 和夫	四條瞭学園大学/大阪発達総合療育センター
評議員・幹事 勝山 真介	東大阪市療育センター	評議員 堀川 博誠	奈良県立医科大学附属病院
評議員・幹事 久保 俊一	京都府立医科大学大学院医学研究科	幹事 加藤 洋	愛仁会リハビリテーション病院
評議員・幹事 佐浦 隆一	大阪医科大学	幹事 北村 嘉雄	大阪府済生会中津病院
評議員・幹事 菅 俊光	関西医科大学附属滝井病院	幹事 高橋 紀代	大阪医科大学
評議員・幹事 住田 幹男	関西労災病院	幹事 道免 和久	兵庫医科大学病院
評議員・幹事 鈴木 恒彦	大阪発達総合医療センター	幹事 中土 保	辻外科リハビリテーション病院
評議員・幹事 高橋 守正	第二岡本総合病院	幹事 中村 健	那智勝浦町立温泉病院
評議員・幹事 武澤 信夫	京都府リハビリテーション支援センター	幹事 福田 寛二	近畿大学
評議員・幹事 田島 文博	和歌山県立医科大学	幹事 宮崎 博子	京都桂病院
評議員・幹事 中馬 孝容	滋賀県立成人病センター	幹事 村尾 浩	神戸学院大学
評議員・幹事 陳 隆明	兵庫県立総合リハビリテーションセンター	自薦 三橋 直志	京都大原記念病院
評議員・幹事 中野 恭一	兵庫県立総合リハビリテーションセンター	自薦 角谷 直彦	済生会有田病院
評議員・幹事 野崎 園子	兵庫医療大学	他薦 川上 寿一	滋賀県立成人病センター
評議員・幹事 長谷 斉	京都府立医科大学附属病院	他薦 林 雅弘	奈良県総合リハビリテーションセンター
評議員・幹事 宮井 一郎	森之宮病院	他薦 東門 美代	神戸在宅ケア研究所/神戸リハビリテーション病院
評議員・幹事 森本 茂	西大和リハビリテーション病院	他薦 小西 英樹	和歌山県立医科大学

# リハ医の現場を訪ねて...

リハビリ医の働く場所は多種多様です。  
 若手リハ医、学生のより深い理解を求めたいと思い企画しました。  
 自薦他薦で投稿を乞います。

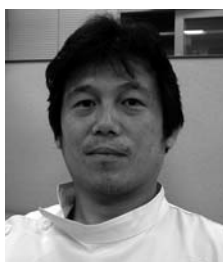


新須磨リハビリテーション病院 佐藤 友治 先生  
 【回復期リハビリテーション病棟】

当院は平成19年6月に開院した回復期リハビリテーション病棟44床のみのリハ専門病院で、脳血管疾患(I)、運動器疾患(I)の施設基準を取得しています。平成20年度の新規入院患者数は165人、在宅復帰率は76.3%、新規入院患者重症度割合は30.9%でした。現在のスタッフは医師3名、看護師15名、理学療法士10名、作業療法士9名、言語聴覚士3名、医療ソーシャルワーカー2名で、共同してリハプランを作成し、リハ室のみならず看護師による病棟訓練も含めて集中的なリハを提供していますがBIも併用しています。

リハ医は午前中には外来診療を中心として新規入院患者の診察などを行っています。午後は病棟業務を中心としながら、嚥下造影検査、装具診およびリハカンファレンスを行っています。また、担当患者および家族に、総合実施計画書に基づきリハに関する説明を行う時間を設けています。

回復期病棟への入院については発症後2ヶ月以内の規定があり、入院患者の状態はリハ的にも疾患的にもダイナミックに変化しうる時期であるといえます。急性期で見逃されていた疾患が見つかったり、時には急変に対処が必要となることもあります。全ての問題を解決できるわけではありませんが、常に患者の退院後の生活を念頭に置いて治療に取り組んでいきたいと思っています。

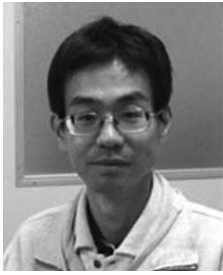


兵庫県立総合リハビリテーションセンター 陳 隆明 先生  
 【更生相談所】

私は長年にわたり兵庫県立身体障害者更生相談所に嘱託医として働いている。更生相談所では障害者自立支援法に基づいて、自立支援医療(更生医療)や補装具の専門的な判定や相談を行っている。構成人員は、医師、身体障害者福祉司、心理判定員、セラピストなどである。兵庫県では更生相談所の判定に兵庫リハセンターの義肢装具士が同席する。各種補装具の判定業務に際して、構成メンバーとしてまさに義肢装具士は適任である。兵庫県の特色として挙げられることは、市福祉事務所や町役場と連携して、県下各地に出向いての巡回相談を行っていることである。巡回

相談以外に、私は原則週一回の頻度で同僚の医師とともに、義足、義手、装具、車いす、電動車いす、座位保持装置などの処方、適合判定や装用指導を行っている。今日のテクノロジーの発展により、高機能な多種多様な製品が開発されており、処方に難渋することも多い。これらのものを適切に選択し、ユーザに処方するためには、従来からのスタンダードな知識に加えて、アップデートな知識を必要とする。補装具は身体に障害を有する方にとって、その失われた機能を補完するための代替療法として極めて重要である。更生相談所のトップに医師でないところが少なくない今日、リハビリテーションの専門家であるリハ医こそが、嘱託医としてこのフィールドで活躍することが最もふさわしい。写真は更生相談所で一緒に働いているメンバーである。





**医療法人社団輝正会 畠中整形外科・リハビリテーション科 畠中 輝昭 先生**

**【開業医】**

私は平成7年卒でリハ科、整形外科を研修してきました。平成17年から畠中整形外科に勤務しております。畠中整形外科は兵庫県尼崎市南西部に位置し、現理事長が昭和58年に開設しました。平成20年5月1日に新築移転、畠中整形外科・リハビリテーション科と改称致しました。それに伴いリハ施設の拡充及びリハスタッフを増員しました。診療科目は整形外科・リハ科・内科・小児科で、常勤医師3名、非常勤医師1名の体制です。運動器リハ施設基準Ⅰ、脳血管リハ施設基準Ⅱ、併設施設として通所リハ、通所介護、認知症対応型グループホーム、訪問リハ、訪問看護、訪問介護、ケアプランセンターを備えています。また大庄北地区には同一法人のさわやか診療所があり、内科診療及び通所リハを行っています。



私は午前と夕方の整形外科・リハ科の外来診察、午後には通院困難患者に訪問診療・往診を行っています。現在の高齢化社会を反映し、外来患者・訪問診療患者の多くは後期高齢者です。骨関節疾患や脳卒中後遺症、パーキンソン病など、痛みや身体に障害を持った方々の在宅生活を支援できるように努めています。しかし日々の患者数が多く、一人一人に十分な診療時間を確保できないことが現在の課題です。今後ともご指導のほどよろしくお願ひいたします。



**兵庫医療大学 リハビリテーション学部 野崎 園子 先生**

**【教育の現場】**

兵庫医療大学は兵庫医科大学の姉妹大学として平成19年に開学した。リハビリテーション学部(4年制)、看護学部(4年制)、薬学部(6年制)からなり、兵庫医科大学の医学生との交流も盛んに行われている。平成22年度には最初の卒業生を臨床現場に送り出す予定である。



セラピストはリハビリテーションの臨床の重要な担い手であり、患者と1対1で密接にかかわる職種でもある。私は、平成20年度よりPT/OTをめざす学生に神経内科学を教えている。疾患の全体像という医学の知識だけではなく、家族を含めた社会的背景、臨床現場に求められている医療者のありかたなどを、医師としての臨床経験をふまえて伝えていきたいと思っているが、現実には教える難しさも実感している。しかし、彼らは時に私の期待以上のものをつかみ、成長している。そのことが私に新しいエネルギーを与えてくれている。

**宇宙医学とリハビリテーション**  
 神戸大学大学院 保健学研究科  
 リハビリテーション科学領域 **三浦 靖史**



大阪医科大学の佐浦教授とJAXAの大島先生

11月28日に開催された第29回大阪リハビリテーション医学研究会で、宇宙航空研究開発機構(JAXA)宇宙医学生物学研究室の大島博先生より「長期宇宙滞在を支える健康管理技術と宇宙医学研究: 若田宇宙飛行士のリハビリテーションを担当して」との演題でご講演を

本人宇宙飛行士がISSに定期的に長期滞在するに当たって、健康管理はより一層、重要性を増している。今回、若田飛行士の長期滞在に当たっては、経口ビスフォスフォネート製剤の投与と、新しい抵抗運動機を用いた運動プログラムが導入された。その結果、帰還後の骨量や骨強度は飛行前よりやや増加しており、尿中カルシウム排泄は増加しなかったことが明らかになった。これは、従来、微小重力環境下では、骨強度は毎月2.5%ずつ低下すると報告されていることから考えると、新たな対策が一定の効果を上げたと考えられる。

将来の有人宇宙活動は、月・火星探査ミッションなどの更なる高度化と、宇宙観光飛行など大衆化の二つの方向での発展が考えられるが、宇宙開発戦略本部は、6月にきぼうの後の有人宇宙活動として、人とロボットが連携した月探査計画を策定している。そのため、重力が地球上の1/6であることや、地球からの距離がISSと比較して著しく遠いことなど、月面の特殊性を考慮した宇宙医学の開発を今後行う必要がある。そして、これら宇宙医学は地上社会から隔絶したものではなく、健康管理や骨粗鬆症予防などの宇宙医学研究の成果は、地上社会に還元されることが大いに期待されており、特にリハ分野は関連が深い。

一方で、多額の国費を費やしての有人宇宙活動にはさまざまな意見が存在することから、まずは完成したきぼうを最大限に活用して、科学技術、その中でも医学生理学分野での発展を図って、国民の理解を得ることが重要である。

このニュースレターが発行される頃には、野口聡一飛行士がソユーズロケットにより打ち上げられて、日本人二人目のISSでの長期滞在を開始している頃である。困難な任務に励まれている宇宙飛行士の方々の健康と活躍を祈念して、本稿を終える。

頂いたので、宇宙医学とリハとの関わりについて簡単に述べる。  
 7月に、国際宇宙ステーション(ISS)における日本の実験棟「きぼう」の最終組み立てと、日本人初の宇宙での長期滞を終えて、若田光一宇宙飛行士が無事帰還した。138日間にも及ぶ宇宙滞在の直後にも関わらずしっかりと自力で歩行して、帰還直後の記者会見に短期ミッションのスペースシャトルのクルーと共に臨んだ若田飛行士は、驚きを持って迎えられた。微小重力環境は、循環系、前庭機能、筋肉、骨など体の様々な部位に大きな影響を及ぼすが、特に抗重力筋の筋萎縮と筋力低下、骨量減少による骨粗鬆症は、究極の廃用症候群とも言えるものであり、急速に進行し回復に長期の時間を要する。また、その影響は長期のミッションであれば、より一層大きくなる。  
 そのため、日本独自の有人宇宙施設であるきぼうが完成し、今後日